令和3年度　学校経営計画に対する自己評価計画書（最終報告）　　石川県立門前高等学校

重点目標　①　ＧＩＧＡスクール構想の実践と共に、探究活動の充実による魅力ある学校づくりを推進する。

個別目標	具体的取組	主担当	現　　状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準			割合	判定	分析（成果と課題）及び今後の対応策	備考
・Chromebookやタブレット等の教育ＩＣＴ環境を活用した生徒一人ひとりに応じた学力の向上や創造性の育成	・教員による「学校評価アンケート」の結果に基づく効果的なＩＣＴ活用による授業力の改善	教務課 GIGA校内推進リーダー 進路指導課 各教科	・ＧＩＧＡスクール構想が求める多様な生徒たちを誰一人取り残すことのなく、公正に個別最適化された学びや創造性を育む学びに寄与する教育ＩＣＴ環境を構築する必要がある。	【成果指標】（教員） 「生徒一人ひとりの学力向上のために個別最適化したり、または、創造性を育んだりする教育ＩＣＴ活用指導力の向上に取り組んでいる」	「教育ＩＣＴ活用指導力の向上に取り組んでいる」と評価した教員の割合（①＋②）が Ａ　８０％以上 Ｂ　７０％以上 Ｃ　７０％未満	① ② ③ ④	取り組んでいる 概ね取り組んでいる 余り取り組んでいない 全く取り組んでいない	53% 42% 5% 0%	A	【分析】ICT機器を積極的に活用する教員が多い。さらに一人１台端末を使用した指導力の向上に取り組む教員が増えてきた。 【今後の対応】GIGA研修、互見授業、小中学校の公開授業を通じて自己研鑽を啓発しICT機器活用をすすめていく。	教員対象調査 （7，1月）
	・生徒による「授業評価アンケート」の結果に基づく効果的なＩＣＴ活用による授業力の改善			【成果指標】（生徒） 「一人１台端末を活用して、教科の学びを深める指導があった」	「一人１台端末を活用して、教科の学びを深める指導があった」と評価した生徒の割合（①＋②）が Ａ　８０％以上 Ｂ　７０％以上 Ｃ　７０％未満	① ② ③ ④	あった 概ねあった 余りなかった 全くなかった	76% 24% 0% 0%	A	【分析】今年度から一人１台端末を使用し始めICT機器を活用していると考える生徒が多い。 【今後の対応】一人１台端末が普及されたことを活かし、新たな学びを深める指導を継続していく。	生徒対象調査 （7，1月）
・探究活動の充実	・教員による「学校評価アンケート」の結果に基づく探究活動の指導力の改善	教務課 進路指導課 各学年 各教科	・地域の輪島市、門前町商店街、関係機関等と連携して、地域活性化に繋がる取組や物品等を具体的に創出する探究活動を行うことで、地域貢献の在り方を身につける必要がある。	【成果指標】（教員） 「地域貢献の在り方を指導するために門前地域の伝統・文化、自然環境、社会環境等を考える場面を創出している」	「門前地域を考える場面を創出している」と評価した教員の割合（①＋②）が Ａ　８０％以上 Ｂ　７０％以上 Ｃ　７０％未満	① ② ③ ④	行っている 概ね行っている 余り行っていない 全く行っていない	53% 32% 11% 5%	A	【分析】探究活動を通して地域貢献のあり方や指導する教員が増えた。 【今後の対応】総合的な探究の時間で情報を共有し探究活動を積極的に行うようになった。これからも情報を共有しそれ以外の教科でも取り組んでいく。	教員対象調査 （7，1月）
	・生徒による「授業評価アンケート」の結果に基づく探究活動の実践力の改善			【成果指標】（生徒） 「地域活性化の在り方を身につける方法を学ぶことができた」	「地域活性化の在り方を身につける方法を学ぶことができた」と評価した生徒の割合（①＋②）が Ａ　８０％以上 Ｂ　７０％以上 Ｃ　７０％未満	① ② ③ ④	できた 概ねできた 余りできなかった 全くできなかった	43% 47% 10% 0%	A	【分析】総合的な探究の時間の取組みを通して、地域活性化について考える生徒が増えた。 【今後の対応】地域の方々の協力を得ながら、取り組みを継続していく。	生徒対象調査 （7，1月）
・生徒の思考力・判断力・表現力の向上	・門高読書タイムや図書館講座の実施	図書課 教務課 進路指導課	・読書活動を通して生徒の思考力･表現力･判断力の下支えする力を養成する必要がある。	【成果指標】（生徒） 「年間３冊以上の本を読んだ（読書タイムに読んだ本も含む）」	「年間３冊以上の本を読んだ」と答えた生徒の割合（①）が Ａ　６０％以上 Ｂ　５０％以上 Ｃ　５０％未満	① ② ③ ④	３冊以上読んだ ２冊読んだ １冊読んだ １冊も読まなかった	45% 37% 14% 4%	C	【分析】2冊以上の割合は８割を超えるが、3冊以上は半数に満たない。 【今後の対応】読書タイム期間に限らず、教科指導等の場でも積極的に学校図書館を活用したり、各クラスに本を設置するなど、本を身近に感じられる環境づくりを行う。	生徒対象調査 （7，1月）
・魅力ある学校づくりの推進	・教員による「学校評価アンケート」の結果に基づく魅力ある学校づくりの改善	各課 各学年 各教科	・小規模校であるためのきめ細やかな指導、保護者・地域の関係者の教育活動に対する熱心な支援等を活かし、保護者・地域の関係者の協力のもと、主に地域貢献の学びを通して、地域活性化に必要な創造力・企画力・情報発信力を育成する必要がある。	【成果指標】（教員） 「教科や総合的な探究の時間・部活動等の専門性を活かし、地域活性化に必要な創造力・企画力・情報発信力を高める指導をしている」	「教科や総合的な探究の時間・部活動等の専門性を活かし、地域活性化に必要な創造力・企画力・情報発信力を高める指導をしている」と評価した教員の割合（①＋②）が Ａ　８０％以上 Ｂ　７０％以上 Ｃ　７０％未満	① ② ③ ④	指導している 概ね指導している 余り指導していない 全く指導していない	47% 47% 5% 0%	A	【分析】①と②合わせて95%と前回に比べて向上した。指導していると考える教員が増えた。 【今後の対応】地域貢献できる人材の育成を続けていくために情報を共有しながら指導を継続していく。	教員対象調査 （7，1月）
	・生徒・保護者・地域の関係者による「アンケート」の結果に基づく魅力ある学校づくりの改善			【成果指標】（生徒・保護者・地域の関係者） 「地域活性化に必要な創造力・企画力・情報発信力が身につく教育活動が実施されている」	「地域活性化に必要な創造力・企画力・情報発信力が身につく教育活動が実施されている」と評価した生徒・保護者・地域の関係者の割合（①＋②）が Ａ　８０％以上 Ｂ　７０％以上 Ｃ　７０％未満	① ② ③ ④	実施されている 概ね実施されている 余り実施されていない 全く実施されていない	51% 45% 4% 0%	A	【分析】実施されている、概ね実施されていると感じる割合が多かった。 【今後の対応】探究活動など、生徒が主体的に地域に貢献できるような活動を地域の方々と協力しながらこれまで以上に行っていく。	生徒・保護者・地域の関係者対象調査 （7，1月）

学校関係者評価委員会の評価	（１）生徒のＩＣＴを活用した授業評価がとても良い。特に、ＩＣＴを活用することによって個々の生徒の学びが深まったと思われる。 （２）ＩＣＴを活用をすることによってどのような教育効果があったと捉えているか。また、地域活性化に必要な創造力・企画力・情報発信力を高めるために、探究型学習にどのように活用しているか。
評価結果を踏まえた今後の改善策	（１）ＩＣＴや一人１台端末の活用によって、協働的な学びを通して思考力や学びを深めることができた。次年度は教科の枠を超えてＩＣＴのより効果的な活用方法について研修を重ねていきたい。 （２）ＩＣＴは探究型学習を進める上で効果的であり、その活用方法、思考の仕方は各教科における協働的な学びや思考力、情報発信力を高める際にも応用されていくと考えている。次年度は、各教科の学びが地域活性化にも生かされるよう、教科横断的に探究型学習を推進していきたい。

重点目標　②　個に応じた多様な教育を推進し、キャリア教育の充実と３年間を見通した学力の向上計画によって、多様な進路実現を図る。

個別目標	具体的取組	主担当	現　　状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準				割合	判定	分析（成果と課題）及び今後の対応策	備考
．進路意識の醸成と早期確立	・外部講師によるキャリア教育講演会 ・クリエイティブ人材育成事業 ・企業人インタビューＤＶＤの活用 ・インターンシップ ・進路講演会 ・進路学習 ・上級学校キャンパスツアー	進路指導課 各学年	・働くことの意味や自分の適性を理解して、将来の進路設計を立てる力を養成する必要がある。	【努力指標】（生徒） 「自分の適性を十分に把握し、将来の進路について話すことができるようになった」	「自分の適性を十分に把握し、将来の進路について話すことができるようになった」と評価した生徒の割合（①＋②）が Ａ　８０％以上 Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上 Ｄ　６０％未満	①	できるようになった	35%		A	【分析】各取組を通じて、大半の生徒が、自分の進路について考えることができた。学期や学年を経るにつれて、進路設計の具体化を図り、目的意識をもって行事を体験させることがおおむねできた。 【今後の対応】外部との関わりを通じて、教員のキャリア教育のプランニング意識と指導技術の向上の取組を継続するとともに、進路設計に特に手立てが必要な生徒の支援策を教員間で共有し、実行する。	生徒対象調査 （7，1月）
						②	だいたいできるようになった	51%				
						③	ほとんどできない	14%				
						④	全くできない	0%				
．個に応じた学習指導の充実による進路実現	・習熟度別授業 ・放課後補習 ・個別指導	進路指導課 教務課 各学年 各教科	・多様な進路志望の生徒に応じた指導の更なる充実が求められている。 ・大学進学を目指す生徒への個に応じた学習指導の向上が求められている。	【成果指標】（教員） （１・２年生） 「対外模試の成績を伸ばすことができた」	「対外模試の成績を伸ばすことができた」生徒の割合が Ａ　７０％以上 Ｂ　６０％以上 Ｃ　５０％以上 Ｄ　５０％未満	７月と１月ベネッセ総合学力テストの比較（全国偏差値） １年生　44.4%(国数英3教科) ２年生　57.1%(国数英3教科) 全体　52.1%(国数英3教科)				C	【分析】１・２年生の半数以上の生徒の成績が向上した。 【今後の対応】大学進学を目指す生徒への個に応じた指導に関して、個々の生徒の性格的な側面も十分に配慮しつつ、強みや弱みを見極めながら、時機をとらえて学習指導に当たることが必要である。	対外模試結果
				【満足度指標】（生徒） （３年生） 「卒業後の自分の進路について満足している」	「卒業後の自分の進路について満足している」と評価した生徒の割合（①＋②）が Ａ　９０％以上 Ｂ　８０％以上 Ｃ　７０％以上 Ｄ　７０％未満	①	満足している	90%		A	【分析】 大半の生徒が自分の進路について満足している反面、第一志望が叶わなかった生徒もいた。 【今後の対応】 進路選択の段階から、担任を筆頭に丁寧な関わりを持ちながら、希望を具体化させていくことが大切である、その過程での充実感が、結果の満足度に深く関わってくると思われる。	生徒対象調査 （7，1月）
						②	だいたい満足している	5%				
						③	余り満足していない	5%				
						④	全く満足していない	0%				
・クリエイティブ人材育成事業による生徒支援の充実と進路実現	・ふるさとへの愛着心を涵養し、能登の産業に貢献する意欲を持った人材を育成する企業見学、講演会、校内研修会の実施	進路指導課 全教員	・就職を希望する生徒の大半は地元を希望するが、進学後に地元就職を希望する生徒は少ない。	【成果指標】（生徒） 「企業見学・講演会等により能登の産業について理解を深め、地元産業に貢献する意欲を持つことができた」	「企業見学・講演会等により能登の産業について理解を深め、地元産業に貢献する意欲を持つことができた」と答えた生徒の割合（①＋②）が Ａ　８５％以上 Ｂ　７５％以上 Ｃ　６５％以上 Ｄ　６５％未満	①	できた	27%		C	【分析】各取組を通して、郷土や能登の産業への理解は深まっている。３年生民間企業就職決定者４名のうち２名が能登地域の会社への就職である。 【今後の対応】諸々の進路行事を通して、地元企業についての知識と理解は深まったが、それが地元産業に貢献する意欲につながったとは言えない。地元の産業の魅力を生徒に感じてもらう方策が必要である。	生徒対象調査 （7，1月）
						②	まあまあできた	45%				
						③	余りできなかった	24%				
						④	できなかった	4%				
・部活動と家庭学習の両立	・結果を出すため、目標を設定し、どのように行動するかなど取り組み方を考え、また結果から改善を行う。	全教員	・ＰＤＣＡサイクルを取り入れて、部活動と家庭学習の両立を行う必要がある。	【成果指標】（生徒） 「入学してから現在まで、部活動と家庭学習の両立が進んでいると感じることができた」（３年生は部活動終了後の切り替えを含め３年間全体で考える）	「入学してから現在まで、部活動と家庭学習の両立が進んでいると感じることができた」（３年生は部活動終了後の切り替えを含め３年間全体で考える）と答えた生徒の割合（①＋②）が Ａ　７０％以上 Ｂ　６０％以上 Ｃ　５０％以上 Ｄ　５０％未満	①	できた	33%		B	【分析】前回時の結果よりも、「できた」「まあまあできた」と答える生徒の割合は減ったが、現状認識の力がついた表れとも考えられる。進路希望先に見合う家庭学習量の確保という視点が生まれ、楽観視する生徒が減った結果とも推測できる。 【今後の対応】どんな進路志望であれ、学校で学習したことと連動した課題に家庭で取り組むことで、基礎学力の向上を目指させたい。授業と家庭学習課題が連動するような授業づくりが必要である。	生徒対象調査 （7，1月）
						②	まあまあできた	35%				
						③	余りできなかった	27%				
						④	できなかった	6%				

学校関係者評価委員会の評価	多様な進路希望に対して個に応じた適切な指導がなされており、生徒の満足度も高い。一方で、学力向上に課題があるように思われる。勉強する目的意識を高める方策が必要ではないか。卒業後に地元に就職する生徒は多いが、進学後にも地元に貢献するような生徒の育成を目指してほしい。
評価結果を踏まえた今後の改善策	個別指導や生徒面談を丁寧に行い、個に応じた進路希望実現を果たしていきたい。学力については、模試での成績向上は見られるものの十分とはいえない。次年度の方策として、生徒の学力を緻密に分析し、具体的な指標と目標を持ち、生徒だけでなく、全教員が目標達成に向けて努力していける体制を構築していきたい。

重点目標　③　ワークライフバランスを取りながら、部活動やボランティア活動によって、学校の活性化を図る。

個別目標	具体的取組	主担当	現　　状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準			割合	判定	分析（成果と課題）及び今後の対応策	備考
．教員の働き方改革の推進	・部活動年間計画、月別活動計画作成及び見直し ・計画的、協働的な校務の推進 ・定時退庁日の設定 ・最終退校時間の設定と実践	全教員	・教員の多忙化解消に向けた取組の実践が喫緊の課題である。	【成果指標】（教員） 「最終退校時間を意識した業務の推進に向けて、計画的・効率的に校務を行っている」	「最終退校時間を意識した業務の推進に向けて、計画的・効率的に校務を行っている」と答えた教員の割合（①＋②）が A　８５％以上 B　７５％以上 C　６５％以上 D　６５％未満	① ② ③ ④	行っている 概ね行っている 余り行っていない 全く行っていない	47% 32% 5% 16%	B	【分析】昨年度の同時期に比べると、「行っている」と「全く行っていない」の割合が高くなっており、意識の差が大きくなっていると考えられる。 【今後の対応】効率よく業務をこなせるような工夫をすることと、特定の教員に業務が偏らないようにしていく。	教員対象調査 （7，1月）
・各種行事・諸活動への自主的参加	・各種校内行事 ・学校企画の諸活動 ・学校祭等の生徒会活動	生徒会 総務課	・どの活動においても概ね意欲的に参加しているが、より自主的な活動になるよう指導し、良好な人間関係形成や自己有用感の向上につなげる。	【成果指標】（生徒） 「各種校内行事に自主的に参加し、自己の役割を果たした」	「各種校内行事に自主的に参加し、自己の役割を果たした」と実感できた生徒の割合（①＋②）が A　８５％以上 B　７０％以上 C　６０％以上 D　６０％未満	① ② ③ ④	果たせた だいたい果たせた 余り果たせていない 全く果たせていない	49% 49% 2% 0%	A	【分析】ほとんどの生徒が何らかの形で役割を果たせたと感じており、校内行事が有意義なものになっているのではないか。 【今後の対応】役割を果たせたと答えられる生徒がさらに増えるように、コロナ禍に合った行事の充実を図る。	生徒対象調査 （7，1月）
．部活動を通した人間力の育成	・競技力、表現力向上を目指した日々の取組	生徒会 部顧問	・限られた時間を有効に活用し、競技力・表現力の質の向上を目指すことで個々の人間力を高める。	【成果指標】（生徒） 「自主的に部活動に取り組むことで、自分が成長した」	「自主的に部活動に取り組むことで、自分が成長した」と感じた生徒の割合（①＋②）が A　８５％以上 B　７５％以上 C　６５％以上 D　６５％未満	① ② ③ ④	できた だいたいできた 余りできていない 全くできていない	63% 29% 8% 0%	A	【分析】日々の活動で、自分の様々な成長を自覚できている生徒が多い。また、昨年度一定数いた、「全くできていない」の数値が０％となった。 【今後の対応】余りできていないと感じている生徒も一定数いるので、何らかの役割を与えるなど成長を感じられる環境づくりを行う。	生徒対象調査 （7，1月）
．ボランティア活動による地域・他者貢献意識の高揚	・総持寺参道清掃 ・海岸清掃 ・暑中見舞い、年賀状作成、等	総務課 生徒会 全校生徒	・学校・部活動単位での奉仕活動に年数回以上参加している。この奉仕活動を通して、何らかの助けを求めている人や地域のために、自主的な意志でボランティア活動に取り組む精神を涵養する。	【成果指標】（生徒） 「自主的な意志でボランティア活動に取り組むことで、自分が成長した」	「自主的な意志でボランティア活動に取り組むことで、自分が成長した」と感じた生徒の割合（①＋②）が A　８５％以上 B　７５％以上 C　６５％以上 D　６５％未満	① ② ③ ④	できた だいたいできた 余りできていない 全くできていない	41% 29% 24% 6%	C	【分析】学校が行っているボランティア活動に対して、自発的に参加したと思える生徒がまだまだ少ない。また、コロナ禍での、活動の制限が結果に影響を与えていると考えられる。 【今後の対応】普段の活動に対して、目的意識を持たせたりして意識づけを行う。	生徒対象調査 （7，1月）
	・各種地域行事への参加	総務課 ボランティア部	・過疎化が進み、独居老人が増えている。お年寄りの方々が参加する各種地域のイベントに積極的に協力することで、他者や地域貢献の精神を涵養する。	【満足度指標】（生徒） 「地域行事やイベントの協力を通して、他者や地域への貢献の意義を理解できた」	「地域行事やイベントの協力を通して、他者や地域への貢献の意義を理解できた」と答えた生徒の割合（①＋②）が A　９０％以上 B　８０％以上 C　７０％以上 D　７０％未満	① ② ③ ④	できた だいたいできた 余りできていない 全くできていない	53% 43% 2% 2%	A	【分析】昨年度と比較して、かなり結果が改善された。「総合的な探究の時間」の学びを通じて、地域行事への関心が強まったのではないか。 【今後の対応】地域との連携を継続し、積極的に地域行事に参加できるような活動を続けていく。	生徒対象調査 （7，1月）

学校関係者評価委員会の評価	コロナ禍でありながらもボランティア活動はよく実施している。地域貢献を体験することは、生徒に達成感や自己有用感を育む意味でもとても有意義であると思う。一方で、教員の多忙化につながらないようにしていかなければならない。ボランティア活動が過重負担にならないように計画を立ててほしい。
評価結果を踏まえた今後の改善策	ボランティア活動は生徒が地域貢献の意義を学ぶ機会として大切にしていきたい。次年度は、全校生徒だけでなく、部活動単位で専門性を生かしたボランティア活動も検討していきたい。「総合的な探究の時間」と連動させて、ボランティア活動から地域貢献のあり方を学ぶ機会もあると思うので、様々な教育活動を通して学ぶ機会を作っていきたい。一方で、教員の多忙化も懸念される。地域の力も活用しながら、教員も生徒も充実感が得られる計画を模索していきたい。

重点目標　④　地域社会や保小中特支と連携し、安心・安全な学校づくりを推進する。

個別目標	具体的取組	主担当	現　　状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準			割合	判定	分析（成果と課題）及び今後の対応策	備考
・いじめの早期発見・早期対応	・いじめに関する校内研修 ・生徒観察、生徒との人間関係づくりによる早期発見・早期対応 ・いじめ調査の実施	生徒指導課 教育相談 教員全員	・昨年度は認知無しだったが、「いじめは起こりえるもの」の意識を教員が常に持ち、未然防止に尽力する。 ・生徒の自己有用感を高め良好な人間関係づくりを進める取組を継続する。	【成果指標】（教員） 「研修会等によって、いじめ問題について理解を深め、予防的生徒指導に結びつけている」	「研修会等によって、いじめ問題について理解を深め、予防的生徒指導に結びつけている」と答えた教員の割合（①＋②）が A　９０％以上 B　８０％以上 C　７０％以上 D　７０％未満	① ② ③ ④	できる 概ねできる 余りできない 全くできない	58% 42% 0% 0%	A	【分析】すべての教員が「できる」「概ねできる」と回答した。これは各研修会や自主的な研修で理解を深めていることが要因として考えられる。 【今後の対応】今後も未然防止・早期発見の観点から生徒に目を向け。耳を傾ける指導を教員の共通理解を通して実践していきたい。	教員対象調査 （7，1月）
・スマートフォン等によるネットトラブルの未然防止	・スマートフォン等によるネットトラブル研修	生徒指導課 教育相談 教員全員	・校内での使用ルールは浸透しているが、家族との連絡以外に放課後使用する生徒が依然見られる。今後もスマートフォン等の危険性を説明し、指導を継続しながら生徒自身がその危険性を意識できるようにする。	【成果指標】（生徒） 「私は校内でのスマートフォンや携帯電話の使用ルールを守っている」	「私は校内でのスマートフォンや携帯電話の使用ルールを守っている」と評価した生徒の割合（①＋②）が A　９０％以上 B　８０％以上 C　７０％以上 D　７０％未満	① ② ③ ④	守れた だいたい守れた 余り守っていない 全く守っていない	51% 47% 2% 0%	A	【分析】 ほとんどの生徒が「守れた」、「だいたい守れた」と答えており、昨年度よりは数値としては向上している。 【今後の対応】今後もルールを守るということに加えて、正しく使用するという指導を継続し行っていきたい。	生徒対象調査 （7，1月）
				【成果指標】（教員） 「私はスマートフォン等のネットトラブルの危険性を理解し、指導に生かしている」	「私はスマートフォン等のネットトラブルの危険性を理解し、指導に生かしている」と評価した教員の割合（①＋②）が A　９０％以上 B　８０％以上 C　７０％以上 D　７０％未満	① ② ③ ④	生かしている だいたい生かしている 余り生かしていない 全く生かしていない	63% 37% 0% 0%	A	【分析】すべての教員が「生かしている」「だいたい生かしている」と回答した。教員のネットトラブルに関する問題意識も高まっていることが要因と考えられる。 【今後の対応】今後は生徒が自らネットトラブルに関して知る機会も増やしていきたい。	教員対象調査 （7，1月）
		保護者	・使用時間・内容など、スマートフォン（携帯電話）等の使用のルール作りについて、継続して家庭での協力を求める。	【努力指標】（保護者） 「家庭でスマートフォンや携帯電話等の使用の仕方について話し合い、実践している」	「家庭でスマートフォンや携帯電話等の使用の仕方について話し合い、実践している」と評価した保護者の割合（①）が A　７０％以上 B　６０％以上 C　５０％以上 D　５０％未満	① ②	実践した 実践していない	79% 21%	A	【分析】昨年度よりも数値が改善した。今年度は年度当初に保護者の方向けに話し合いをお願いする場面を設けた。 【今後の対応】今後は生徒に対しても各家庭で話し合いする機会を作るようにこれまで以上に指導していく。	保 護 者 アンケート （7，1月）
・通学時の交通安全	・自転車マナー指導 ・教職員・ＰＴＡによる街頭指導 ・交通安全に関する調査	生徒指導課	・自転車マナーに関する指導を受けた生徒は昨年度いなかったが、保護者・地域の方にも協力を仰ぎながら今後も生徒の規範意識向上に取り組む。	【努力目標】（教員） 「生徒の交通安全意識向上のための指導として、街頭指導の参加、普段の日の登下校時での交通安全の声かけなどを積極的に取り組む」	「生徒の交通安全意識向上のための指導として、街頭指導の参加、普段の日の登下校時での交通安全の声かけなどを積極的に取り組んだ」と答えた教員の割合（①）が A　９０％以上 B　８０％以上 C　７０％以上 D　７０％未満	① ② ③ ④	できた だいたいできた 余りできていない 全くできていない	68% 32% 0% 0%	D	【分析】秋のグッドマナーキャンペーンには全職員が参加し、前期と比べると数値が大きく改善した。 【今後の対応】来年度はグッドマナーキャンペーン以外にも、登下校の指導の場を設けて、登下校時の生徒の安全確保に努めていきたい。	教員対象調査 （7，1月）

学校関係者評価委員会の評価	教育課題は多岐に渡るが、生徒の安全・安心が最優先である。今年度は数値が向上しており、努力の成果が窺われるが、様々な切り口で指導を継続してほしい。
評価結果を踏まえた今後の改善策	様々な教育課題に対して校内研修に取り組んできたが、社会の変化に目を向けつつ適宜必要に応じて取り組んでいきたい。コロナ対応も含めて、危機管理意識を高めるために様々なケーススタディに取り組んでいきたい。最も重要なのは組織的対応である。教員数は少ないが、一人一人が当事者意識を持つように有意義な研修を計画していきたい。